

インタビュー / OSDL

基幹系システムでの適用を拡大するには
UNIX 同様の機能とサポートが不可欠

はじめに、最近のLinux & OSSの動向について、どのように捉えていますか。

平野 Linux&OSSのメリットとして「コスト削減」をあげられますが、ここで言うコスト削減は、ハードウェアに依るところが大きいと思います。今日のハードウェアは、インテル系のマシンの普及によりコモディティ化（共通部品化）が進みました。この流れがLinux&OSSを利用した場合のコスト削減に大きく影響しています。その一例として、LinuxとIAマシンとの連携があげられます。もともとLinuxは、サーバ系のOSとして注目されてきました。この動きと並行して、IAマシンが進化してサーバとして利用できるようになりました。このIAマシンとLinuxを組み合わせることで、大幅なコスト削減が可能となったのです。

ソフトウェアのコモディティ化は進むのでしょうか。

平野 ソフトウェアに関しては、元来コモディティ化という考え方がなかったのですが、Linuxの普及により、OSのコモディティ化が進む可能性が出てきました。その上のミドルウェアやアプリケーションについては、デファクトスタンダードは成り得てもコモディティ化はまだ難しいでしょう。特にアプリケーションに関しては、現在はまだプロプライエタリ・ソフトウェアとOSSとのハイブリッドソリューションを採用していくことが良いでしょう。アプリケーションの操作性が低ければ、当然、生産性は向上しません。フロント系においてもLinux&OSSの普及が進んでいますが、無理にOSSを適用するのではなく、適用領域を踏まえて使いやすいものを採用していくことが大切です。

中国や韓国での動向についてお話ししてください。



OSDL, inc
アジア統括ディレクタ
平野 正信氏

平野 中国と韓国はLinux&OSSの適用については、欧米や日本とは少し異なる観点から取り組んでいるようです。中国では、デスクトップでの適用に力を入れていきます。サーバ系に関しては、サポートに対しての意識があまりなく、価格を重視した製品選びの延長からLinuxに興味を持っているというのが現状です。

一方韓国では、サーバ系に関しては、海外ベンダーの製品が主流なため、この分野での動きは少ないようです。現在、注力しているのはモバイルや家電への適用です。中国では韓国の製品が広く普及しています。このようなことも韓国でのLinux&OSSに対しての動きに影響しているでしょう。

最近のトピックスとして注目すべきことはありますか。

平野 2005年10月から日立製作所(株)が基幹系Linuxの高信頼化を支援する「Linux信頼性強化サービス」を開始しました。同サービスには解析資料（メモリダンプ）取得ツールの提供なども盛り込まれています。これまで、Linuxをミッションクリティカル分野で適用する場合、その第一の課題は「Unixと同様の機能とサポートを提供できるのか」でした。同サービスなどは、この課題への回答であり、ミッションクリティカル分野でのLinux適用が本格化したことの表れだと思います。